

しれないが、装置の性能を出すのに必要以上に時間がかかり、研究成果に直結するような実験にさくことのできるビームタイムは実質的に少なくなり、特筆すべき成果を出しにくい状況になっていた。ユーザー側のみならず施設側にもフラストレーションのたまる状況になっていたようである。この点は、この秋のビームタイム配分では考慮されているとのことである。

上坪所長からも共同利用方式を多様化して、分野による特徴を生かしたり、ある程度メリハリをつけた利用形態をとりたい旨の説明があった。たとえば、特定課題制度を設け、ある基準を満たした課題については重点的にビームタイムを配分する予定であるとのことである。また、R&Dビームラインの位置づけおよび利用方法、産業界利用の促進などについても基本的な考え方を示された。

施設側からすると成果の集約を誰がどのような形でするのかという問題もあるが、この点については十分議論する時間がなかった。少なくとも、ユーザーには論文発表したものについては積極的に登録手続きをして欲しい旨の要望が所長からもなされた。

一方、利用者懇談会自身としてSPring-8の将来計画に積極的に提言すべきであるとの意見も出された。SGの役割り同様に利用者懇談会そのものの役割も問われているものと思われる。

高橋 敏男 *TAKAHASHI Toshio*

東京大学 物性研究所 先端分光部門

〒106-8666 港区六本木7-22-1

TEL : 03-3478-6811, ext.5621

FAX : 03-3478-1619 (直通) 03-3401-5169 (事務室)

e-mail : ttaka@issp.u-tokyo.ac.jp

サブグループの労と果実 - 研究の停滞を打破するために -

大阪大学大学院 基礎工学研究科
今田 真

拡大世話人会の出席者は、前日に開かれたSPring-8懇親会にもご招待いただいた。7年前から毎年、SPring-8関係者と地域との交流の場をかねて行われているとのこと、初めて出席させていただいた私はその盛大さには面食らった感があった。パーキュー大会だったわけだがあいにくの雨で、半分以上の人は食堂の中にいたが大変な混みようだった。あらためてSPring-8という組織の大きさに驚かされるとともに、地域との関係を大切にしている姿勢を感じる事ができた。

さて、今回の拡大世話人会のテーマは「ユーザーモードでのサブグループ及び世話人の役割」であった。SPring-8で建設期を終えて利用実験期に入った多くのビームラインで、利用者懇談会のサブグループや世話人の果たすべき役割は、当初のビームラインを提案してそれを建設し立ち上げるための集まりというのとは異なるはずだというのが発想の原点

である。

利用実験期におけるサブグループの役割としてまず挙げられたのは、ビームラインや実験ステーションの維持や高度化についてユーザーが話し合う場ということである。ビームラインの維持管理は既にSPring-8の職員の任務と認識されていると思う。しかし、ビームライン及び実験ステーションのさらなる改善や高度化についてはユーザーの要望で行われるべきであるし、どのように高度化するかについてはユーザーの意見をまとめる必要はある。これについてはサブグループ毎に具体的な事情や程度の差はあるものの、共通の認識であったように思われる。

もう一つ挙げられた可能性は、コミュニティの成果をまとめる母体としての役割である。すなわち、同じ手法を用いている研究者が1~2年に1度定期的に集まって研究会などを開き、その分野のSPring-8での成果を取りまとめることである。しかし一方で、

利用実験課題の申請がサブグループとは全く独立に、サブグループに属さない研究グループからも出されているので、サブグループで研究成果の取りまとめをすることは不可能であるし適当ではないとの意見も強かった。SPring-8としての成果の取りまとめという意味では、実験終了後60日以内に提出する利用報告書がUser Experiment Report としてまとめられている。ただ、ユーザーとしても、アニュアルレポートへの投稿やSPring-8シンポジウムでのポスター発表を積極的に行ったり、実験成果を学会発表・論文発表した時には論文発表連絡表の提出を怠らない、といった、成果を施設側にフィードバックする不断の努力が必要であろうと反省も含めて感じた。

さて、サブグループの役割に関連して話題に上り、今回の拡大世話人会の中でも重要な議論だったと思われるのが、「建設グループとして立ち上げに払った多大な労力が報われておらず、当初予定した研究が停滞している」という次のような声であった。『実験ステーションの(場合によってはビームラインについても)設計から立ち上げにあたっては、各サブグループの中の有志が多くの日数と力を割き、研究室の主力をSPring-8に送り込んできた。しかしながら、SPring-8から優先的に認められたのは、純粋に「立ち上げのための」ビームタイム即ち立ち上げ課題だけである。実際、半年から長くても1年に満たない立ち上げ課題は、装置の立ち上げと調整に費やされ、実際の研究成果はほとんど出なかったビームラインが大多数である。立ち上げ課題が終わると、立ち上げメンバーもそれ以外の研究者も同じ土俵で課題申請をし、全く平等に審査される。満足の行くといわないまでもある程度のビームタイムを確保するためには、何件もの力のこもった課題申請書を半年毎に書かなければならないし、立ち上げメンバーの課題が全く通らないこともある。これでは意図していた研究が進まない』。このような意見はこれまであまり表に出なかったが、グループによって程度の差こそあれ、建設グループの間の共通の認識である。これに対し、SPring-8としては、建設グループの課題を優先的に採択するといった創業者利益的なことは認められないとのことであった。もちろん、「創業者利益」の行き過ぎは良くないが、「現状は創業者不利益だ」との声に代表されるように、立ち上げの労力が不当に低く評価されかつメンテナンスや性能向上への期待だけがのしかかっていると言

わざるを得ない。

それでは、利用者懇談会としてSPring-8に対してどのような要望をすればよいか。上のような意見を踏まえて私が提案させていただいたのは、「実験ステーションの立ち上げ及び高度化は利用研究と一体のものとして3年程度有効な特別課題として取り扱う」ことである。そもそもビームラインや実験ステーションを立ち上げたり高度化する目的はそこではできない研究を遂行することであるから、立ち上げや高度化は利用研究と切り離すことができないはずである。それが切り離されているところが現状の問題の中心である。このような特別課題の形を取れば、建設グループの士気も自然と上がるし、当初予定されていた研究が確実に遂行され、成果も着実に上がると期待される。その特別課題が走っている間でも、ビームタイム全部を独占するのではなく一般の利用研究課題を平行して行うのは言うまでもない。

もう一つ付け加えさせていただくとすれば、利用研究課題選定委員会のプロセスの中で、サブグループや建設グループの意見も聞かれるべきであると思う。課題選定にあたってはビームライン担当者の意見も聞かれていないと理解している。もちろん課題選定の結論は選定委員会が出すべきであるが、そのビームライン及び実験ステーションで何がどこまでできるかを一番良く理解している建設グループやビームライン担当者の意見が、課題選定プロセスの中で少なくとも参考にされるべきである。課題選定のプロセスには、このほかにも問題が含まれるように思うので、利用者懇談会の場で一度徹底的に議論することを提案したい。

今回の拡大世話人会では、サブグループからの率直な意見が多数出たと思う。利用者懇談会が今後ともこのような雰囲気大切に、ますます活発な議論の場を提供することを期待したい。

今田 真 IMADA Shin

大阪大学大学院 基礎工学研究科

〒560-8531 豊中市待兼山町 1-3

TEL : 06-6850-6421 FAX : 06-6845-4632

e-mail : imada@mp.es.osaka-u.ac.jp

略歴：1991年9月 大阪大学大学院 理学研究科 物理学専攻修了。

1991年10月 大阪大学 基礎工学部教務職員。

1992年6月 同助手。

1997年4月 大阪大学大学院 基礎工学研究科講師。